

JIA 四国支部と木造建築

JIA四国支部で木造といえば、真っ先に頭に浮かぶのは高知地域会であろう。山本長水先生をはじめとする諸先輩方が作り続けておられる「照るときは照る、降るときは降る」高知の自然と地場の資材とともに建ち上がる「土佐派のいえ」は、建築史家の村松貞次郎さんに「土佐の家はカツオのたたきのように活きがよく身切れが厚い」と評価され全国的にも認知された、日本の土着の建築群のひとつである。また高知では、そういった家を設計できることが建築家としての基本的な素養であることを建築家仲間が共有している、とはよく聞く話である。若手、ベテランを問わず、多くのメンバーが中規模木造建築にも取り組んでいる。高知にCLTのラミナ工場があることもあり、新しい架構等へのチャレンジ心もまことに旺盛である。

愛媛の仲間たちによる木造建築としては、松村正恒による日土小学校校舎の保存再生が特筆される。建て替えの声が強まる中で、既存部分は資料に忠実に元の姿へ戻しながら修復し、新校舎部分は既存部分に敬意を払いつつ今日的な解釈を加えて愛媛地域会の会員たちが改修設計を行った。他にも、日本を代表する構造家と組んだ宿泊施設や商業施設の事例も数多く、愛媛の建築家の学究肌がうかがえる。

香川は他の3県に比べると森林が少なく、しかし木造建築の事例が少ないかというそうでもなく、逆に全刀比羅宮、日本最古の芝居小屋である金丸座、善通寺の五重塔、高松城、披雲閣、郷屋敷など、多くの国宝や重要文化財が存在する。瀬戸内海歴史民俗資料館などの名建築を残した建築家・山本忠司に学んだ者や様々な経歴を持つメンバーが、県都高松に集中することなく、各々の地域で木造施設や木造住宅に取り組んでいる。

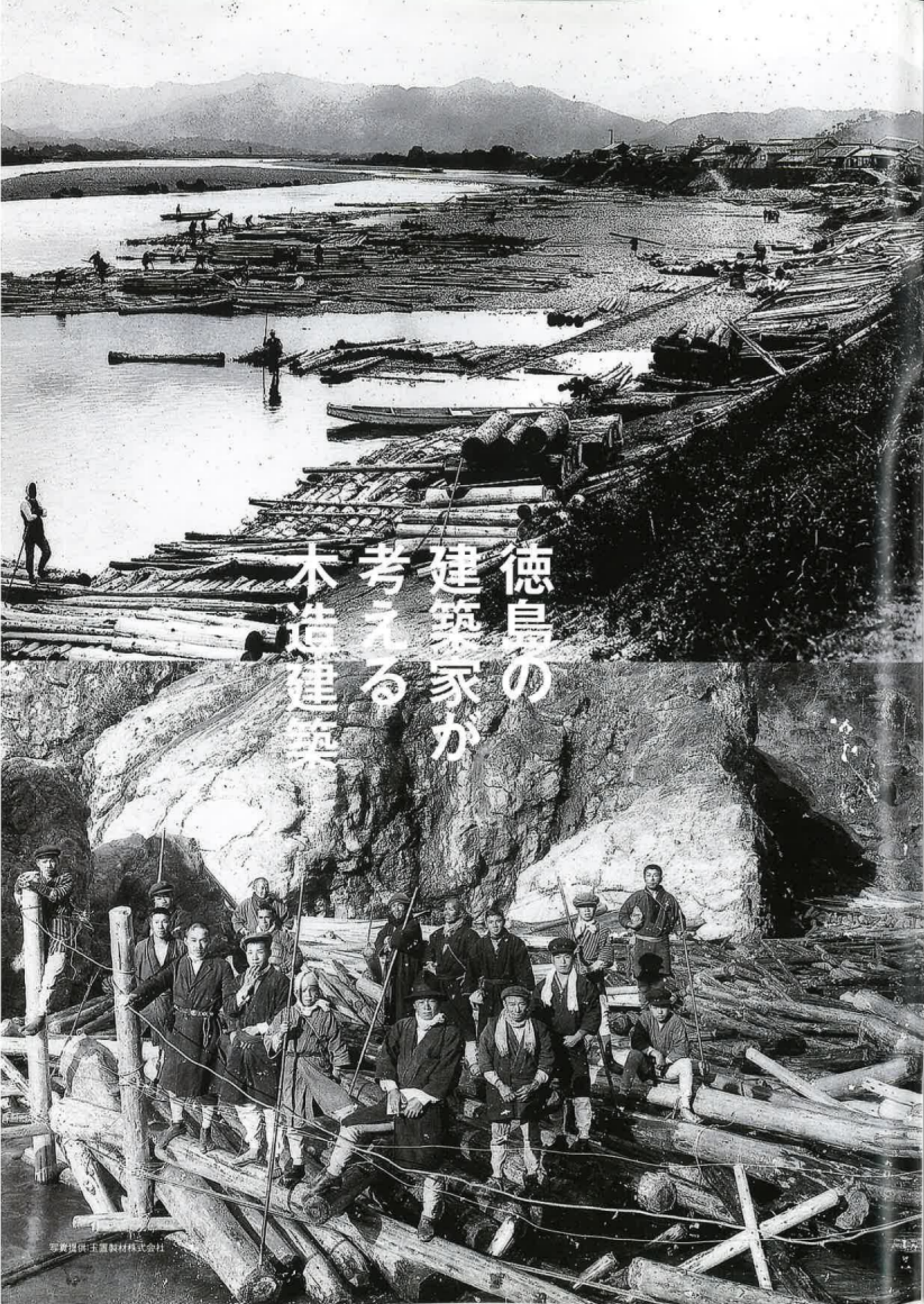
徳島はどうか。木造建築に限らず、見学したい建築の数が他県に比べて少ないことは否めない。1997年に1冊目、2014年には新たに2冊目が発刊された「建築巡礼88」(JIA四国支部事業)を見ても、地元建築家によるもの、有名建築家によるもの問わず、四国四県の中では少し迫力不足であるように思われる。

しかし視線を我々の祖先に移せば、少し見方が変わってくる。林博彦氏の研究による一考察では、阿波勢力(後の阿波忌部族)は、弥生後期から古墳前期(3~4世紀)にかけ、吉野川流域を中心にその勢力を展開し、海部と力を合わせ阿波地域を拓き、ヤマト王権成立に大きな影響を与えたという。阿波勢力は日本各地に麻・穀を植え、農業・養蚕・織物・製紙・建築・漁業・衣食住の生活文化技術や産業技術、古墳築造技術(農業土木技術)などを伝播させた技術集団、かつ祭祀集団であったことが次第に判明してきた。それらの技術や思想を伝播させたのは、剣山系の風土や農文化にあったと推測される。

ヤマト王朝時代の古墳に阿波の青石が使われ、石室の築造には徳島に多く残る古墳群と同様の技術が見られることをとって、阿波と卑弥呼につながりがあったことは想像に難くない。2018年に世界農業遺産に認定されたにし阿波の傾斜地農耕システムを見れば、農、食、医、住が一体となった豊かな暮らしが、ヤマト王朝以前より剣山、祖谷から佐那河内村にかけての地域で栄え、今もなお続いていることに目を見張る。人が山に住むためにあらゆる知識や技術が必要とされたそのような暮らしが、産業革命による人口の都市集中、職能の単一化・単純化、給料をもらうための仕事によって成り立つ単調な暮らしへと変遷する中で、人は山を下り、なんでもできた多機能な人たちは企業や社会のなかで臆る存在になりながら分散していった。

2010年に公共建築物等木材利用促進法が制定されたのを受けて、全国に先駆けてとくしま木材利用指針が作られた。すでに1980年代から各地で中・大規模木造建築が多く建てられるようになっていたこともあり、JIA四国支部各地域会から木造建築に力を入れているメンバーが集まり、徳島県建築士会、徳島県建築士事務所協会、日本建築学会四国支部徳島支所のみなさんにも声をかけて、シンポジウム「2050年へ 徳島建築の木造化を考える」が開催された。各地での様々な取り組みが紹介され、パネルディスカッションでは川上の方々からの意見もいただき、徳島すきを使った建築の未来を切り開こうという機運が高まった。

木造建築をテーマにした寄り合いが増え、2012年には木造建築学校がスタート。机上で考えられてきた木造建築だが、川上から川下までの循環の一部として立体的に検討されなければならないということに、みんながだんだん気づき始めた。木材備蓄と自然乾燥を組み合わせることと良材を常に準備しておいて、中規模・大規模建築の発注にも柔軟に対応できること。目利きによる材料調達と、伝統技術継承者たちによる伝統構法の存続。原理主義に陥ることなくエンジニアードウッドにも目を向ける木造、そして木質化建築。かつて徳島から日本各地に出かけて行ってその足跡を残した建築集団が形を変えて今日に再結成されるイメージを持ちながら、多面的な徳島建築の木造化にますますみんなで頑張っていきたい。



徳島の建築家が考える木造建築

2050年の四国・徳島の建築を考える
～初めての、徳島建築四国団体合同シンポジウム～

TOKUSHIMA ARCHITECTURE VISION
2011»2050

2011年2月12日(日) 会場:しんじょうむ「2050年へ 徳島建築の木造化を考える」
12:15-14:00 開会式 14:00-15:00 阿波文化館/2050年の建築展
15:00-15:30 徳島建築四国団体の活動について
15:30-17:00 パネルディスカッション/2050年へ、徳島建築の木造化を考える
17:00-18:00 懇話会

シンポジウム「2050年へ 徳島建築の木造化を考える」のメンバー

